山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第17号（2004. 3）

心理アセスメントにおける黒－色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢 (2)

名島　潤慈

Black-Color Tree Test, Self-Portrait Drawings, Fishing of Wild Pearl Oysters and Dreams in Psychological Assessment (2)

NAJIMA Junji

(Received December 17, 2003)

ABSTRACT

This paper deals with the clinical significance of the Fishing of Wild Pearl Oysters which was originated by the author. Furthermore, it deals with the suicidal risk related to various drawing methods, and trees and self-images appearing in the clients' dreams.

Key words : Fishing of Wild Pearl Oysters, suicidal risk, dreams

Ⅰ　本稿のねらい

「心理アセスメントにおける黒–色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢(1)」では黒－色彩バウムテストと自画像を施行・解釈するさいの留意点について述べたが、本稿では真珠採りについて述べたい。さらにまた、バウムテストや人物画（自画像を含む）と自殺危険性との関連性、夢のなかに出現するバウムや自己像についても述べておきたい。

Ⅱ　真珠採り

質問形式による投映法としては、①児童精神科医の Kanner（1957）が用いた「３つの願い (Three Wishes)」、②さまざまな社会的葛藤状況を含んだ６つの未完成の物語のセット (a set of six incomplete stories)（Anderson & Anderson, 1954)、③未完成の童話を読んで聞かせた後にその物語を完成させる「フィナーレ創作法（Finale Composing Technique : FCT)」(清田, 1984)、④もしも生まれ変わるとしたらどんな動物になりたいかを問う「転生願望法」(山中, 1978）などがある。

真珠採りはこれらと同様、質問形式による投映法である。具体的にはクライエントに対して、＜あなたは今、海底で真珠貝を採っています。海の上には小舟がいて、空気ポンプからパイプを伝わって空気が海底にいるあなたに送られています。小舟のなかの空気ポンプが規則正しく押されませんと、海底のあなたは窒息死してしまいます。あなたは空気ポンプを押す役を誰に頼みますか＞と質問する。クライエントが答えたら、その人物を選んだ理由も聞いておく。ちなみに、真珠採りの代わりに、あるいは真珠採りと同時に、「ノアの方舟」や「最後の晩餐」といった質問を用いることもある。前者は大洪水が起こった

ときどんな人々を方舟に乗せたいと思うかをクライエントに聞くもの、後者は死ぬ前にどんな人たちと食事したいと思うかを聞くものである。どちらも筆者なりに考えた質問である。

真珠採りについてはこれまで特に論文にまとめたことはないが、筆者は約20年前から臨床場面で用いている。クライエントは子どもから大人まで、どのような年齢でもよい。所要時間はほんの数分である。ごく簡単な質問であるし、クライエントに対する侵襲性は一般に低い。

実施上・解釈上の留意点としては以下である。

(1) ほとんどのクライエントは応答してくれる。応答拒否はまずない。ただし、なかには質問に対して、「えー、どうしよう。困ったなー」などと困惑・狼狽するクライエントもいる。このような場合には応答を無理強いしないほうがよい。

(2) 他人にも自分自身にも絶望しているような青年の場合、あるいは人生にひどく疲れているような青年の場合、「ポンプを押す人なんて、誰にも頼まない」「特に誰も。死んだら死んだでそれもいいし」などと答えることがある。淡々とした口調のことが多い。

(3) 重要な人物としては、その多くが家族、それも父親ないし母親が選ばれる。もちろん、兄弟姉妹が選ばれることもある。例えば、あるクライエント（小学校４年生女子，長女，学習障害）は学業成績のよい妹に対して否定的な感情を抱いていたが、しかし、ポンプを押す人としては妹を選んだ。つまり、このクライエントは感情的には妹を嫌っていたが、同時に、いざというときには頼りになる人物として信頼してもいたのである。

(4) 友人が選ばれることもある。その場合にはいわゆる親友が多い。「友だち。幼なじみで、大の親友」（高校３年男子，対人緊張）といったものである。

(5) クライエントが大学生くらいになると交際相手や恋人が選ばれることもある。「そうですねー・・・。今つき合っている人。私は自分に自信がないので、相手は私を情緒不安定と思っているんではないか。相手は普通の人。不安なのは、自分がさみしいのでつき合っているんではないか。大学生のなかには、自分の悩みから逃げるために人とつき合って留年してしまう人もいる」（大学４年生女子，自信欠如）といったものである。

ちなみに、筆者は「心理学」の授業時間を利用して、平成15年11月、さまざまな学部の大学１・2年生を対象にして真珠採りの調査を行ってみた。男子学生（77人）の場合、空気ポンプを押す人として選ばれたのは、多い人から順に、友人（親友を含む）(35%)・父親（21%)・親（13%)・恋人（８%)・兄弟（７%)・プロ（業者）（４%）であった。母親・家族・サークルの先輩・機械・未来の花嫁はすべて１%であった。一方、女子学生（100人）の場合、多い人から順に、友人（親友を含む）(25%)・母親（22%)・父親（21%)・兄弟（兄や姉など）(11%)・恋人（７%)・親（６%)・家族（４%)・サークルの先輩（２%）であった。高校の先生とプロ（業者）は１%であった。結果を要約すると、①男女共に友人が最も多い。②両親については、男子ではもっぱら父親、女子では母親と父親が選ばれる。③男子では「誰にも頼まない（１%)」と「特にいない（５%)」という答えがあったが、女子ではこのような答えは１人もなかった。

Ⅲ　真珠採りにまつわるテストバッテリーについて

真珠採りはクライエントにとっての重要人物を推定するだけであり、クライエントの欲求や理想といったものとは関係しない。それだけに、真珠採りは単独で用いるよりも、上

述の「３つの願い」や「転生願望法」などと組み合わせたほうがよい。

３つの願いは、＜もしも神様が何でもあなたの願いをかなえてくれるとしたらどんなことをお願いしますか＞と問うものである。ごく簡単な質問ではあるが、得られる内容は深い。特に幼児・児童の場合には、切実かつ赤裸々な欲望が語られることが多い。余談ながら、平成15年10月19日の午前７時頃名古屋市において、男児の母親と交際していた高校３年生男子生徒から腹部を蹴られてその日の夕刻に腹部内出血で死亡した４歳の男児は生前、男児が通っていた保育園の園長に対して、３つのお願いを母親に伝えてくれと願ったという。それは、「お母さんと一緒に寝たい。一緒にお風呂に入りたい。お母さんに抱っこしてもらいたい」というものであった（平成15年10月22日の日本テレビでの保育園園長の談話より）。

稀にではあるが、本人の願望とは逆の（ないし無関係な）事柄が語られることがある。ある小学校３年生女子は３つの願いの質問に対して即座に、「みんなが幸せになること。みんなが長生きすること。みんなが大切な心を覚えておくこと」と答えた。しかし、彼女に対する周囲の人たちの評価は、「マイペースでトラブルメーカー。（施設の）他の子どもたちを叩いたり、言葉で脅したりする」というものであった。彼女のいささか博愛主義的な答えはおそらく、検査者の目を過剰に意識したものであったものと思われる。ちなみに、彼女がかいた色彩バウムは、樹冠のなかに人の目の形をした実が４つなっているという特異なものであった。

一方、転生願望法は、＜もしもあなたが生まれ変わるとしたらどんな動物になりたいですか＞と問うものである。これは山中が佐竹隆三から口伝されたとのことであるが、創案者は不明。以下、筆者の資料のなかから組み合わせの実際例を挙げる。

小学５年生男子。不登校。彼は、「３つの願いなら、ファミコンとお金と友だち。生まれ変わったら猫になりたい。いつものんびりしているから。空気ポンプを押す役はお母さん」と答えた。

20代前半の男性。主訴は「下着盗を止めたい」。彼は３つの願いに対して「お金持ち。財界のドンになりたい。裏の世界の権力を持ったドン。あとは、ハーレムの長」、真珠採りでは「高校のときからの親友」、転生願望法では「タカかワシ。肉食性で獰猛。生命力が強いし、空を飛べる。獰猛で、食いっぱぐれがない」と答えた。

30代前半の男性。主訴は「意欲がない。神経質。対人関係がうまくいかない」。彼は、３つの願いに対して「死んだ父親が生き返って、母親と再婚してほしい」、真珠採りでは「親。＜お母さんのことですか？＞どちらでも。おやじが生きていれば、おやじ」、転生願望法では「猫。いつものんびりしているから」と答えた。

３つの願い・真珠採り・転生願望法を組み合わせても、かかる時間はほんの数分である。しかし、ここから得られる臨床データは、上に述べたようにクライエント理解に大いに役立つものが含まれていることが少なくない。

Ⅳ　自殺の危険性について

われわれ心理臨床家にとって最も留意すべきは自殺の危険性であろう。自殺のプロセスは、①「自殺性なし」→②死にたいと思う「希死念慮レベル」→③自殺を考える「自殺念慮レベル」→④自殺手段の準備をも含む「自殺行動」→⑤「自殺未遂ないし既遂自殺」となる（張ら，1999）。筆者自身は、自殺してしまうとその人が上がっていくべき発達の階

段が永遠に放置されてしまうという理由から、自殺には反対である。自殺はまた、後に残された家族に癒しようのない傷を与えることが多い。特に、年少の子どもたちには辛い体験となる。(2000年に存在している20歳未満の自死遺児は約９万人という。自死遺児編集委員会・あしなが育英会編，2002を参照。)

自殺は一般に多重決定因的である。例えば、縊首によって生を終えた初期青年期のある女性の場合、①思春期から始まった継続的な自己破壊行動（頻回の手首自傷と頸部自傷)、②薬物乱用（医師・友人・インターネットなどから入手したと推測される精神安定剤や中枢神経刺激剤)、③家族関係の不和、④主治医による入院治療の勧めの拒否、⑤不眠と焦燥感（学業の遅れに対する焦り）などが錯綜していた。

自殺学では自殺の危険度・緊急度を評定するためのさまざまな評定尺度・質問紙が考案されてきているが（勝俣，1980)、それでも自殺の予測はむずかしい。(予測できたとしても予防がむずかしい。）自殺の危険因子（suicide risk factor）としては、①過去の自殺企図歴、②精神疾患（うつ病、アルコール症、境界人格障害など)、③自殺の家族歴、④男性であること（日本では女性の２.5倍)、⑤年齢の高さ、⑥独身（特に死別や離別)、⑦重要な対象喪失体験（近親者の死・社会的地位の喪失・失職など)、⑧事故傾性、⑨過去の被虐待体験（夫婦間暴力を含む)、⑩ソーシャルサポートの欠如、⑪身体疾患（癌やエイズなど)、⑫反社会的傾向（非行や犯罪）などがある（高橋，1992，1996；Jacobs ed.，1999；門本，2003を参照)。その他、張ら（1999）と張（2001）は、「強い解離性向＋自殺念慮」を危険因子として挙げている。心理学的には、孤立無援感（helplessness)・絶望感（despair)・自己評価の低さ（low self esteem)・攻撃性（aggression)・罪悪感（guilty feeling)・重度の不安と不眠（severe anxiety and insomnia）などが重要とされている。

本節ではもっぱらバウムテストと人物画（自画像を含む）に的を絞って、自殺の危険性についての諸家の見解をまとめておきたい。なお、「心理アセスメントにおける黒−色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢(1)」で触れた石川の未完成サインは、経時的に描かれた数枚の絵から読みとれる自殺サインである。未完成サインはもちろんバウムテストにも人物画にもあてはまるが、ここではそれ以外の事柄について述べる。

１．バウムテスト

平成３年7月４日の熊本日日新聞夕刊に、作家の有島武郎（1878-1923）が自殺する直前に描いた樹木のスケッチが掲載された。絵の右下には、「1923」という年号が入っていた。

よく知られているように、有島は1923年６月9日の未明、軽井沢の別荘浄月庵において、婦人公論の記者であった波多野秋子（当時30歳）と縊死心中した。約１か月後の７月6日に死体が発見されたときには腐乱して蛆が湧いていたという。両者はそれぞれに遺書を残していた。『或る女』『カインの末裔』『生れ出づる悩み』などが有島の代表作であった。有島の晩年のうつ状態は「内因性うつ病」であったと言われている（春原，1971を参照)。

有島は、自殺する１か月前の山陰旅行では、鳥取砂丘において、「浜坂の遠き砂丘の中にしてさびしきわれを見出でつるかな」という歌を詠んでいる。有島のバウムは葉も実もない、幹と枝のみのバウムである。有島がこのバウムを鳥取で描いたものだとすれば、季節は春なので、それだけバウムのさびしさが際立ってくる。ともあれこのバウムは有島の自己像の投映であり、歌のなかにある「さびしき我」とよく照応していよう。

有島のバウムからうかがえるのは、感情面のうっくつ（枝のふくらみ）や葛藤（交差し

た枝)。感受性は繊細で神経質（細やかな枝ぶり，不連続線)。孤立感や寂寥感（葉や実の欠如，根よりも上の地平線)、不安ないし抑うつ感（影)。おそらく10代後半のころに何か重要な心的外傷体験あり（枝の切り口とその位置：簡便法による)。内省的・生産的な思考様式（三次元描写)。外界からのプレッシャーがあり、活動性は低下している（押しつぶされた冠部)。

よく知られているように、自殺はうつ病ないしうつ状態と親近性がある。斎藤・大和田(1971）や斎藤（1973）によれば、正常群と比較した場合、うつ状態群（抑うつ神経症群と内因性うつ病群）のバウムの特徴は、①サイズは小さく、高いバウムは少なく、上縁出が少ない、②管状幹・基部の管状幹・根の欠如が多い、③幹や枝にふくらみやくびれが多い、④空白の幹が多い、⑤幹の基部より上に地平線が描かれたものが少ない、⑥地平線を欠如したものが多い（バウムが宙に浮いているものが多い)、⑦葉が描かれているものが少ない、といったものである。(抑うつ神経症群と内因性うつ病群とを比較した場合には、立体描写・管状根・左上がりの地平線・左への傾斜が抑うつ神経症群に多い。用紙の中位置でのバウムの右への傾斜は内因性うつ病群に多い。）また、Castilla（1994）は抑うつ傾向（tendance dépressive）を示すバウム特徴として、「垂れ下がった樹冠」「下降する枝ないし茂み（悲観主義)」「幹や根元の濃い陰影（不安のサイン)」「葉のない枝（対人接触の困難さ)」などを挙げている。このCastillaの主張は臨床的に納得のいくものである。

一口にうつ状態のバウムと言っても個人差が激しいものである。しかし、もしもバウムの特徴からうつ状態が推定される場合には、①クライエントに対してうつ状態に関する質問、つまり抑うつ気分・自責感・不眠・食欲低下・興味や関心や集中力の低下・焦慮感などに関する質問を行ったり、②Beck Depression Inventory（BDI)・Zung Self－rating Depression Scale（SDS)・Hamilton Rating Scale for Depression（HRSD)・Kasahara's Depression Inventory Scale（KDI)・The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale（CES－D）といった抑うつ尺度を施行したり、さらには、③自殺に関する質問、つまり現在の自殺念慮・現在の自殺計画・過去の自殺未遂歴などについての質問を慎重に行ってみることが大切となろう。

その他、Buck（1948）によれば、ある精神神経症の女性は木に節穴（knot hole）を描いたが、それは彼女の解釈によれば、数年前の自殺未遂によってできた傷跡（scar）を表現しているという。また、佐藤ら（1978）は京都大学1年生の自殺意図群（過去1年以内に自殺を考えた学生）では、幹の傷や枝の切り跡の表現が通院学生群や通院学生に対する対照学生群よりも有意に多かったと述べている。もっともこれは自殺意図群、つまりいわゆる「自殺念慮」を抱いたことのある群であって、実際に自殺を企図したものではなかったが。

2．人物画

精神医学的絵画療法士（psychiatric art therapist）のWadeson（1975）は、自画像の両手と首にはっきりと目立つ傷跡（prominent scars）を描いたある女性のケースを紹介している。自己卑下と罪意識にさいなまれていた彼女は、その自画像をかく前日に彼女の両手と首を傷つけたという。Wadesonはまた、(人物画ではなくて自由画であったが)ループ状の形のものやらせん形の図像（渦巻き）の持つ意義、つまり「絵による自殺思考の伝達（pictorial communication of suicidal thoughts)」を強調している。

Virshup（1976）は自殺の危険性を示す切傷線（suicidal slash）とループ現象（loop phenomenon）について述べている。前者は人物像のどこかに不自然かつ不必要な切れ目が入っているもの、後者は、髪の毛が女性の首の回りに巻き付いていたり、蛇がループ状にとぐろを巻いているといったものである。後者の絵をかいた若いメキシコ系アメリカ人男性は、後に首吊り自殺をしたという。

Hammer（1986）はある退行期うつ病の男性が描いた人物画について、彼が描いた男性の人物の首もとを鉛筆で斜めに切りつけた（切傷線を引いた）という事例を報告している。この男性は後に、何度か自殺未遂を引き起こしたという。Richman（1986）も、手首や首の切傷の線は「破壊衝動、それも特に自己破壊衝動」を表すとしている。

Wadeson や Virshup の言う切傷線は自画像や人物画では比較的よく見られる。

ループ現象については、筆者自身も経験したことがある。ある女子中学生は紙の上方に縦長の楕円形を描いたが、その楕円形の下端は人間（自画像）の首にかけられていた。（縦長の楕円形は結局、楕円の形をしたロープであり、そのなかに自画像の顔の部分がすっぽりとはまった形であった。）彼女は日頃から、何か嫌なことがあった場合には「死にたい」と言うのが口癖であった。彼女の描いたループはまさに、絵による自殺思考の伝達であった。もっとも、彼女の場合あくまでも自殺思考のレベルにとどまっており、実際の自殺企図行動は見られなかった。その意味では、「自殺を具体的に表現するときは自分のおかれている状況を客観視できる余裕があり、表現が抽象的あるいは象徴的になるにつれ、危険度、緊急度が高くなってゆくと考えてよい」という石川（1980）の提言は貴重である。

V　夢との関連性

筆者は、インテイク面接においては必ずクライエントに「最近見た印象夢」をきくようにしている。最近見た印象夢には、クライエントの心理・社会的危機が如実に現れていることが少なくない（名島，1982）。ただし、本節ではあくまでも、バウムと自己像（セルフイメージ）について夢との関連性を論じてみたい。ちなみに、夢、それも特に印象夢は心理アセスメントだけではなくて心理療法においても大変利用価値の高いものである。また、苦労の多い仕事に携わっている心理臨床家が陥りやすい「バーンアウト」「逆転移」、さらには「コンパッション疲労」（Figley, 2002）などへの自己対応にさいしても夢は有効である。夢主自身が夢の意味をつかむための介入技法（質問）に関しては、名島（1999, 2003）に詳しい。簡単に言えば、①夢素材連想質問、②全体感想質問、③夢ポイント質問、④伝達－警告質問、⑤夢関連性質問、⑥対応性質問、⑦潜在感情質問、⑧抽象性質問、⑨対提示質問の計９つで、①から④までが一般的介入、⑤以下が特殊的介入である。

1．夢のなかのバウム（樹木）

バウムが夢のなかに出現することはめったにない。もしも出現したとしても、それは林とか森といった風景の形で出現することが多い。しかし、まれには木そのものが中心的なテーマで出現することがある。例えば、ある40代前半の女性が見た「毒の木の夢」。夢の内容は、「私は逃亡者。見つかっても抗戦するために、家の中庭で毒のある木を育てている。しかし突然、もしもこの木を息子が毒と知らずに食べてしまったらどうしようかと心配になる。下手に木を捨てたりすれば、逃亡者である自分の存在が人に知られてしまうかもしれない。私はどんどん大きくなる木を前にして、立ち上がる元気もない。毒の木なんか育

てなければよかったと後悔する」というものであった。(「毒の木」に象徴されている家族的意味については省略する。)

水俣（1998）が報告しているある過食症の女性の夢は大変興味深い。それは、「苗木に水をやるがやりすぎてあふれ、水を捨てるが、少しすると土が乾いてきて、また水をやってやりすぎて」を夢のなかで繰り返すというものである。水俣が考察しているように、自己（木）とセラピストの働きかけ（水）と中間領域で営まれる治療的体験（土）の相互関係がよく出ている。

2．夢のなかの自己像

夢のなかの自己像はきわめて多彩である。隠喩という観点からすれば、夢のなかの動物も他者も物体もすべて夢主の自己像ということになるが、ここでは夢主そのものの姿に焦点をしぼりたい。

筆者のこれまでの印象では、自画像や人物画に比べると、夢のなかの自分ははるかに躍動的かつ赤裸々なものである。例えば、夢のなかで「自分の体が誰かにナイフで切り刻まれていく。ナイフを防ごうとして右手を出すと、出した右手もスパスパと切られていく」といったイメージが自画像や人物画に表現されることはまずない。このように躍動的かつ赤裸々なものとなる理由としては、①自画像や人物画はいくら絵だとは言っても、クライエントの覚醒自己が描いている限り意識的・内省的な要素が混入せざるをえないが、夢の場合には夢自己が機能していること、②自画像や人物画が描かれる画面は静止した1枚の紙であるが、夢の場合には映画のように連続した場面であることなどが考えられよう。

夢のなかの自己像については別の所で少し述べたことがあるが(名島, 2003)、「親になった自分」「子どものときの自分」「男装（ないし女装）している自分」など。自己像のなかでも身体的な自己像としては、「やせ衰えてあばら骨が浮き出た自分」(苦行僧への同一化＝家出による出立願望)、「アメーバのように体がどろどろに溶けた自分」(父親へのうらみ)、「体全体はスリムなのに、お腹だけが大きく膨れあがった自分」(結婚への期待と妊娠して母親になることへの不安)、「まわりの人たちよりも縮んで、こびとになっている自分」(他者から嫌われているという強い確信)、「ガリバーのように巨人となった自分」(自己誇大感＝劣等感の補償)、「焚き火が燃え移って頭の髪の毛が燃えている自分」(死の不安)といったものである。

もしもインテイク面接においてクライエントから夢が報告されたなら、夢のなかの自己像がどのようなものであるかに注意してみるとよい。そして、対応性質問や抽象性質問などを用いて夢の意味をクライエント自身に見いだしてもらうとよいだろう。

Ⅵ　おわりに

筆者は本論文において、真珠採りという質問形式の心理テストの臨床的な留意点について述べた。あわせて、バウムテストや人物画（自画像を含む）と自殺危険性との関連性、夢のなかのバウムや自己像についても触れた。

今回執筆した「心理アセスメントにおける黒–色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢」の (1) (2) においてはもっぱらインテイク面接場面を想定したが、心理療法場面におけるテストの利用については稿を改めたい。

筆者自身はクライエントがもしもインテイク面接において最近見た印象夢を報告してく

れたら、ことさら投映法（ならびにその他の心理テスト）を行うことはあまりない。夢という隠喩的表出物には自己像だけでなく、対人関係や危機の様態などさまざまな情報が含まれているからである。しかし、すべてのクライエントが夢を報告してくれるわけではない。

インテイク面接は単にケースを受理するだけの面接ではなく、クライエントの内的資源や自己破壊の危険性がどのようなものかを見積もるための面接でもある。心理臨床家としては、内的資源・危険性を読みとるためにたえず投映法についての経験と知見を深めていくことが大切となろう。

引用文献

Anderson, H. H. & Anderson, G. L. 1954 Children's perceptions of social conflict situations : A study of adolescent children in Germany. *American Journal of Orthopsychiatry*, 24, 246-257.

Buck, J. H. 1948 The H-T-P technique : A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology. Monograph supplement No.*5. Vermont : Brandon. 加藤孝正・萩野恒一訳, 1982, HTP 診断法, 新曜社.

Castilla, D. de 1994 Le test de l'arbre-Relation humaines et problèmes actuels. Masson : Paris. 阿部惠一郎訳, 2002, バウムテスト活用マニュアル—精神症状と問題行動の評価, 金剛出版.

張　賢徳　2001 自殺の生物学的原因究明の現状と今後の展望　精神医学, 43: 12, 1286-1294.

張　賢徳・竹内龍雄・林　竜介・池田政俊・花澤　寿・日野俊明・冨山学人・鈴木和人・広瀬徹也　1999　自殺行為の最終段階についての研究：「解離」仮説の提唱と検証　脳と精神の医学, 10: 3, 279-288.

Figley, C. R. 2002 Compassion Fatigue : Psychotherapists' chronic lack of self care. *Journal of Clinical Psychology*, 58: 11, 1433-1441.

Hammer, E. F. 1986 Acting out and its prediction by projective drawing assessment. 松本真理子訳, アクティング・アウトは描画にどのように投影されるか　家族画研究会編, 臨床描画研究 I, 金剛出版, 139-149.

春原千秋　1969　有島武郎—激情と落潮の生涯　加賀乙彦編集・解説, 現代のエスプリ51 作家の病跡, 至文堂, 260-264.

石川　元　1980　自殺の表現病理　精神神経学雑誌, 82：12, 792-802.

Jacobs, D. G. (Ed.) 1999 *Guide to Suicide Assessment and Intervention*. California : Jossey-Bass.

自死遺児編集委員会・あしなが育英会編　2002　自殺って言えなかった　サンマーク出版

門本　泉　2003　非行臨床における自殺予防のための基礎的研究　心理臨床学研究, 21: 1, 91-97.

Kanner, L. 1957 *Child psychiatry. 3rd ed.* Springfield. Illinois : Charles C Thomas. 黒丸正四郎・牧田清志訳, 1964, 児童精神医学, 医学書院.

勝俣暎史　1980　自殺の予測　上里一郎編, 自殺行動の心理と指導, ナカニシヤ出版, 125-158.

清田一民　1984 「フィナーレ創作法」による物語あそびの芸術療法的意義　精神医学, 26: 7, 731-737.
水俣健一　1998　不格好な身体像—過食症　こころの科学, 82, 48-52.
名島潤慈　1982　インテーク面接における夢の臨床的意義について—登校拒否の1症例　熊本大学教育学部紀要, 31, 人文科学, 241-249.
名島潤慈　1999　夢分析における臨床的介入技法に関する研究　風間書房
名島潤慈　2003　臨床場面における夢の利用—能動的夢分析　誠信書房
Richman, J. 1986 *Family therapy for suicidal people*. New York : Springer. 高橋祥友訳, 1993, 自殺と家族, 金剛出版.
斎藤通明　1973 陳旧性分裂病・うつ状態にみられる特徴　林　勝造・一谷　彊編著, バウム・テストの臨床的研究, 日本文化科学社, 69–101.
斎藤通明・大和田健夫　1971　バウムテストの研究（第2報）—うつ状態の場合　松仁会誌, 10, 29-37.
佐藤正保・青木健次・三好暁光　1978　大学生に集団的に実施したバウムテストの量的分析の試み（第1報）　臨床精神医学, 7: 2, 75-87.
高橋祥友　1992　自殺の危険—臨床的評価と危機介入　金剛出版
高橋祥友　1996　自殺の危険性の評価　精神科治療学, 11: 10, 1019-1026.
Virshup, E. 1976 On graphic suicide plans. *Art Psychotherapy,* 3, 17-22.
Wadeson, H. 1975 Suicide : Expression in images. *American Journal of Art Therapy*, 14, 75-82.
山中康裕　1978　思春期内閉 Juvenile Seclusion—治療実践よりみた内閉神経症（いわゆる学校恐怖症）の精神病理　中井久夫・山中康裕編, 思春期の精神病理と治療, 岩崎学術出版社, 17-62.

参考文献

Gliatto, M. F. & Rai, A. L. 1999 Evaluation and treatment of patients with suicidal ideation. *American Family Physician*, March 15. http://www.aafp.org/afp/990315ap/1500.html
小嶋雅代・古川壽亮子（訳著）　2003　日本版 BDI－II—ベック抑うつ質問票—手引き　日本文化科学社
成田智拓・佐藤哲哉・平野茂樹・楠　和憲　1999　笠原のうつ病スケール（Kasahara's Depression Inventory Scale ; KDI）の信頼性と妥当性　臨床精神医学, 28: 5, 555-562.